

さくらやま便り

No.336号 2022年（令和4年）9月15日



アボガド（1）

エッセイ（3）

板東 洋三郎



早勤の仕事が休みの日は、思いつき朝寝坊する。ウォーキングに出かけた妻が準備しておいてくれた朝食の被いを取ると、半切りにして皮をむき、うつぶせに置いたアボカドが目に着いた。それは、その優しくも懐かしいアボカドグリーンと共に、50年以上も昔のある日の夕方の出来事を思い起こさせた。

そのころ私は、ブラジルのサンパウロ市の南郊外にある大学の農場で働きながら学んでいた。カーニバルが終わり、新学年が始まっていた。広いキャンパスは、行き交う学生たちで溢れ、独特の活気に満ちていた。私は、神学部の1年生として5年ぶりの学生生活を始めていた。授業は7時半から12時半の5時間で私の場合は、午後に農場で働くことで前期の授業料と寮費は賄われることになっていた。

しかし、後期以降の学費は現金での支払いのみで、学内の労働もできなかった。さりとて私に学費の算段があったわけではなかった。ただ、大学は休暇中や余暇に、契約している出版社の書籍の訪問販売を認めていると聞いていた。

その日は、大きな牛舎の周りの草刈りをしていて。いつものことだが、午後4時を回るころから空腹が襲ってくる。そんな時、何か固いものに足が触れた。見ると大きなアボカドだった。反射的に私はそれを拾い上げ、皮をむきほおぼった。ブラジルのアボカドは、日本国内で出回っているメキシコ産のものよりも2、3倍以上も大きく、若者の空腹を満たすには十分であり、まさに天来のごちそうだった。

だが、そもそも、なぜそんな所で私はアボカドで空腹を満たそうとしていたのか。それは、その日に先立つ5年余りの紆余曲折の末に行き着いた地点が、その場所であったと言っことに尽きる。

60年代の中ごろ私は、北海道から高校の先輩を頼り上京し、国分寺の新聞店で住み込みのアルバイトをしながら一浪の後、都内の大学で学んでいた。ところが、学費の高騰に反対する学園紛争が起り、それは更に、日米安保闘争へと拡大し、過激さを増していった。学問の自由や授業料値上げなどには個人的に関心もあつたので、警官隊から放水され、脛を蹴られながらも、連日デモに参加していた。

しかし、活動家たちの権力争いや、大学のスポンサー企業に引き抜かれていくリーダーたちの存在は、闘争の過激化や警官隊の圧力以上に、学生運動や学問への私の関心を急速に委縮させた。そして、あれほど入りたかった大学を、手続きもせずに辞めてしまった。

ただ、大学を辞めたことに後悔はなかったが、将来について判然としない憂鬱な日々がそれに続いていた。そんなある日の朝、配達を終えて、残った朝刊を見ていた私の目に「ブラジルに青年の村を」という地域版の小さな記事が目飛び込んできた。記事には、東京農大を中退してブラジルに渡り、広大な土地やおらかな人々に魅せられた青年が、かの地に「青年の村」を作ろうと、参加者を募っているとあつた。その日のうちに市内に住む記事の主を見つけた私は、話を聞き、その場で計画に参加する決断をした。

その後2週間ほどの間に、更に8名の参加者があつた。私たちは、甲州街道や五日市街道沿いの住宅街を小型トラックで回り、廃品回収をして資金を作った。計画は順調に進み、先発に選ばれた私は、練馬区にあつた、独身移住者のための訓練所に入った。

従来、移住は家族単位で行われていて、独身の移住者には現地での呼び寄せ人が必須であつた。私が、内村鑑三の流れをくむ、あるキリスト教会が運営するこの訓練所入ったのは、この訓練所が戦前戦後を通じて、北米、中米、南米に多くの移住者を送っており、独身移住者の要望に適した呼び寄せ人を紹介してくれるからであつた。

訓練所の日課は、朝食前のランニングで始まり、集会で讃美歌を歌い、聖書が読まれ、移住の歴史、現地の言語や生活習慣などの受講であった。殺伐とした生活をしてきた身には、実に新鮮で充実していた。

しかし、この課程を終了するためには「試験」があり、それは、なんと1か月間の無銭旅行であった。「試験」の日の朝、おにぎり2つが参加者に配られ、仲間が見送るなか、国道に出た私は、手を挙げて止まってくれる車を待った。だが、さすが東京は北海道の田舎とは違う。止まってくれたのはタクシーだけだった。(次号に続く)

生活相談員から

ケアハウス主任 遠藤裕之

1 行事予定

9月18日(日) 敬老祝膳 11時

レストランで、施設長からの祝辞と栄養課長から祝膳メニューのご説明を致します。挨拶終了後にスタッフが居室までお祝膳をお運びいたします。当日は平服でお集まりください。

2 節水ゴマの点検

10月5日(水) 10時

お部屋の水道に設置している節水ゴマの点検をさせて頂きます。業者がお部屋に入り作業いたします。3階から行う予定です。ご協力お願いいたします。

3 健康診断

11月1日(火) 午後

入居者様の健康診断を行うこととなりました。採血・心電図・胸部レントゲン・採尿・医師の問診などを予定しています。日程が近くなりましたら、改めてご案内いたします。

4 インフルエンザ予防接種

特養医務室と調整中です。詳細が決まり次第お知らせします。

5 計報

9月3日に小山さかの様のご逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

6 もしも手帳について

横浜市から「もしも手帳」と「もしも手帳分かりやすい版」が届きました。この手帳は「もしも」のときに備えて、元気なうちから治療やケアについて、思っていることを整理して書き残しておくものです。ぜひご家族や大切な人と一緒に考えるきっかけにしてください。

ご希望の方にお配りいたします。事務所の窓口にてお声がけください。

7 特養の状況報告

シャローム横浜(特養)では、入居者様や職員が時間差で感染する状況が続きました。一旦落ち着いたように見えても、急な状況の変化が起きる場合もあることから、慎重にならざるを得ません。この状況はシャローム桜山の皆様にも少なからず影響があり、現時点では体操教室も行えておりません。今しばらくご不便をおかけしますがご理解くださいますようお願い致します。なお、理美容につきましては、9月に入ってから状況を見て再開する予定です。しばらくの間、メニューを制限させていただくことがあるかもしれませんが、皆様にはご不便をおかけいたしますが、なにとぞよろしくお願いいたします。

栄養課から

主任 佐藤 学

味付けのメは「心」

料理に必要な道具は幾つもありますが、本当に必要な道具を選べたら皆様は何を選ばれますか。食文化が発達しますと、使う器具も多種多様で、何かひとつだけに絞ることはできません。いまは電

子調理器具が進歩し、一台で幾つもの仕事をこなす「スチームコンベクション」というものまで登場しました。シャロームの栄養課でも無くてはならない機材です。オーブン(熱)とスチーム(蒸気)を調節することで「焼く」「蒸す」の他に「煮る」「茹でる」「炒める」「炊く」「揚げる」等、ほぼすべての調理が可能です。皆様にお出ししているお食事の多くも、この調理器具を使っています。

しかし、個人的には、どんなに道具が素晴らしくても、料理の味を最後に決めるのは、何と言っても「心」だと思います。作る者が自分の五感をしっかりと働かせて、熱や匂い、食材の感触等を感じながら心を込めて料理することに加え、それを食べて頂く皆様の顔を思い浮かべて料理することで、料理は完成し皆様のところへ運ばれていくものだと思います。このことはシャロームに実習に来る学生さんたちにもお伝えしていることです。

料理の技術は時間と経験である程度上達しますが、「美味しい料理を食べて頂きたい」という思いは「育つ」ものというよりは「深まる」ものだと思います。料理の基本もやっぱり「愛情」だと言ってよいでしょう。大量調理が基本の施設のお食事ですが、できる限りの真心を、自分の思いと一緒にお届けできれば幸いです。

9月の誕生者

6日 森 久子 様
7日 自念 喜代子 様
16日 滝口 孝一 様
22日 齋藤 勇夫 様

お誕生日、おめでとうございます。お健やかな毎日をお祈り致します。